

## 【要旨】

日本におけるゾウの舶来は、応永 15 年（1408）に南蕃船が若狭国に着き、当時の天皇であった後小松上皇へ献上したという事例を初見とし、その後、第 2 回目は天正 3 年（1575）に明船が豊後に来航し大友義鎮に献上した事例が見られる。第 3 回目は、慶長 2 年（1597）にルソン総督が豊臣秀吉に献上した事例が見られ、第 4 回目は、慶長 13 年（1608）安南から献上した事例が見られる。そして、享保 13 年（1728）に鄭大威が徳川吉宗に献上した事例が第 5 回目である。その後は、文化 10 年（1813）に長崎へ舶来したが幕府が拒否したとされており、文久 3 年（1863）に横浜へ舶来した際は、江戸や大坂で見世物となったという。その中でも、享保 13 年（1728）の舶来は、関係史料が多く残っているため研究対象として特に注目されている事例である。

本論は、江戸時代における舶来動物についての研究で、享保 13 年（1728）舶来のゾウに焦点を当てた研究である。江戸時代における動物の舶来について、これまでの研究では舶来動物全体に関する通史的研究が多くみられる。また、享保 13 年（1728）舶来のゾウに関しては、江戸時代における身分や地域を越えた知識や情報の広がりが存在したことが明らかにされている。

しかし、ゾウに関する藩制文書、地方文書、出版物などの史料が豊富であるにも関わらず具体的な書誌的研究が少ない。

本論の第一章では、享保 13 年（1728）に、広南船船主である鄭大威が広南（ベトナム）から雌雄のゾウを連れて長崎へ来た際、当時の長崎唐通事・彭城藤次衛門によって作成された書付の写しである『享保十三申年六月十三日長崎入津鄭大威牽渡候象之義象遣廣南人申候趣之書』、『視聴草初集二』、『通航一覧』の 3 つの史料から、ゾウの利用価値、飼育方法、道具、身体的特徴、繁殖方法、飼育小屋など、ゾウに関する知識を総覧した。

これら 3 つの史料は同一の内容であるが、書写年がそれぞれ享保 14 年（1729）、文政 13 年（1830）から安政 7 年（1860）の間、嘉永 3 年（1850）から嘉永 6 年（1836）の間と異なっている。特に『視聴草初集二』と『通航一覧』に関しては享保から 100 年以上経過しており、文政から嘉永年間までの社会を見てみると、天保 8 年（1837）のモリソン号事件や、天保 11 年（1840）のアヘン戦争などから幕府は西欧列強の脅威を感じ、西欧列強による我が国の危機を回避しようと試みたことがあった。すなわち、このような時代背景から、享保 13 年（1728）のゾウの舶来を例に、幕末の日本における対外関係の心得を説いたのではないかと考えられる。

第二章では、享保 14 年（1729）にゾウが長崎から江戸へ向かう道中の様子が分かる書付や触書の記録について考察した。ここでは、岡山藩領を通過した際に当時、岡山藩主池田家の家臣で小仕置であった伊木頼母が記録した『象通候節之留帳』、遠江国引佐郡東海道気賀宿にある中村家がゾウに関する先触や追触の写しをまとめた『享保十四年四月御用象本坂通之節御触書之写』と『享保十四年酉四月吳異國より献上之大象来朝本坂越江戸江

下候気賀泊御留書』の3つの史料を挙げた。これらの史料は、それぞれ藩領である岡山と、幕領である気賀宿で作成されたもので、これらは宿場から宿場へリレー形式で伝送された。よってこれらの史料から、長崎から江戸までのゾウの運搬システムのみならず、当時の藩領と幕領における制度や地域を越えた行政システムを指摘した。

第三章では、享保14年(1729)に出版されたゾウに関する版本について考察した。享保13年(1728)に舶来したゾウは翌14年(1729)に長崎から江戸へ向かうのだが、そのゾウの通行をきっかけに出版されたのが、『馴象編』、『象志』、『象乃みつき』、『馴象俗談』、『広南靈象図』、『馴象詩』などのゾウに関する版本である。

ここでは出版された版本の中から、『象志』、『象乃みつき』、『馴象俗談』の3つの史料を挙げて考察する。これらの版本における共通点は、ゾウの生息地がベトナムやインドであること、身体が大きく、また象牙には様々な用途があること、人間と同じように感情を持つこと、軍用に使われていたこと、古代から仏教界における靈獣として信仰されてきたことなど、類似した内容が多く中国文献から引用されていることである。

しかし、これらの版本が出版された経緯をそれぞれ考察したとき、建前は庶民にもゾウに関する知識を広める一方で、本音はゾウのブームに便乗し、仏教や儒学の教え説き、それぞれの学派の正統性を主張しようとする著者たちの意図を指摘した。

本論では、享保13年(1728)舶来のゾウについてのこれまでの研究で明らかにされている、江戸時代における身分や地域を越えたゾウに関する知識や情報の広がりや再検討するとともに、これまでの研究では行われていない、ゾウの情報源となった書付、触書、版本の具体的な書誌的考察を行った。